
Radical Magical Witches

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a d i c a l M a g i c a l W i t c h e s

【Nコード】

N 7 9 0 0 D

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

秋留みんとはある日喋るぬいぐるみと出会い、科本花鈴は最凶と呼ばれた魔女に出会い、ハリマク・ラティ・リイオレシアは不思議な少女に出会った。みんとは花鈴とハリマクに出会い、過激で神秘的な刃と血に彩られた非日常に足を踏み入れる

零へ魔女と剣

満月の夜。利水市で一番高いビル^{かがみ}の屋上。

「フフ、」

赤い豪華なドレスを来た女性が楽しげに微笑んだ。

それはこの場に相応しくない微笑み。

女性の目の前にいた二人の男は女性を睨み付ける。追い詰めてるのは自分達であるはずなのに何故女性が笑っているのか。

女性は笑みを絶やさず脇に魔法円を呼び出しそこから背丈程もある大剣を取り出す。

「あなた達のあだ名、ストーカーA、Bでいいかしら」

あからさまに挑発するような物言い。

「デメエツ！」

金属の手甲を装備し二本の戦斧を持ったタンクトップにカーゴパンツ姿に長髪を後ろに束ねた青年が叫び、女性に飛び掛かるうとして野太刀を持った着流し姿の青年に止められる。

「何しやがる宗近！」

「落ちて着け恒次。ここまで来たんだ、アツくなるんじゃない。足元掬われるぞ」

恒次は渋々下がり、宗近は野太刀の切っ先を女性に殺気を込めて突き付ける。

「第三環状世界 サードサークル 第四世界 フォースリング 『アルタレス』及び第三世界 サードリング 『デールミティ』、第四環状世界 フォースサークル 第一世界 ファーストリング 『グヴァンド』及び第二世界 セカンドリング 『ラースラース』で連環環境管理基本法第四条、第十条、第二十三条を違反し、連環世界の秩序を乱した罪は重い。連環環境管理局 『ヘイムダル』特戦課 『フツノミタマ』の名において、『天崩^{てんほう}魔女』ヒストレシア！ 貴様をここで断罪するっ！」

ヒストレイアは笑みを消して真っ直ぐ宗近と恒次を見据えた。

「私を断罪する……か。フツ、悪いけど、私には貴方達に断罪されるいわれも無いし今ここでやられる訳にはいかないの」

宗近はその言葉にどこか切実なものを感じられ、訝るが恒次は気にせずに殺気をヒストレイアに向けた。

「ハンツ！ ざけんじゃねえっ！ どの口で言ってやがる！！」
疾風迅雷！』」

駆け出しながら言霊を叫び、それと共に鉄甲が淡く光り、魔力が戦斧へと流れ込む。

「行くぜえっ！！ 『雷光斧っ！』」

戦斧が電気を帯る。そのままヒストレイアに近寄り自分の間合いに入って斧を二本同時に横なぎに振るった瞬間

「温ぬるいわ」

「なっ！？」

ヒストレイアの一言と共に恒次は宗近の元まで吹き飛ばされた。

宗近と恒次は驚き、目を見開く。

「《天下五剣》がこの程度？ 笑わせるわね」

ヒストレイアは冷笑を浮かべ、大剣を担いで二人の方へ歩き出す。

「ちっ。恒次！」

「わあってるよー！！」

二人は同時に動き出す。宗近は右から、恒次は左から。その速度は残像が残る程。しかし

「『バーストウォール』」

それだけで自分の周囲に青白い光の膜を作り出す。そして、二人の斬撃が膜に当たった瞬間、強烈な爆風が二人を襲う。

「つつ！！」

「かはっ！！」

あまりに圧倒的。あまりに不可解。

今まで宗近と恒次は幾度となくヒストレイアを追いつめて来たはずだった。だと言うのにここに来ての圧倒的な差は何なのか。

そんな疑問が頭の中を駆け巡り、宗近と恒次はそのまま意識を失った。

倒れ伏す二人を見つめるヒストレイアは、先ほどまでの妖艶な雰囲気ではなく、疲労と憂いを感じさせるどこかたびれた様だった。「ごめんなさいね、宗近さんに恒次さん」

そう呟くと二人を光が包み、次の瞬間には跡形もなくそこから消えていた。

「……………ん」

何かを呟き、ヒストレイアはその場から消え去ってしまった。

巻 1 〈少女と刀〉

そこかしこの人形の山。様々な刃物が飾られている壁。そんな異様な部屋にピピピという目覚ましのアラーム音が鳴り響く。

「……………んあ？」

この部屋の主、秋留みんがその音にのそつと起き上がり、目覚ましを止める。それから部屋の人形達に眠そうな声で「……………はよ」と朝の挨拶を掛けた。みんとはもそもそとベットから這い出し、ゾンビが何かの様にのろのろと部屋から出て行った。

ダイニングまで来ると姉の希緒きおがテーブルでコーヒーを飲みながら芸能ニュースを見ていた。その空いてる手にはリモコンが。みんとはおもむろに近付くと、獲物に襲いかかる獅子の様な迅速さでリモコンを奪い取る。

「あつ、何すんのよみんと！」

「はよ、希緒ねえ」

言いながら変えた先はNHKニュース。とてもこの年頃の少女とは思えないチョイスである。

せつかくいいところだったのに、と怒る希緒を尻目にみんとは目を眠そうに擦りながらニュースを見る。

そこでは、東京の浅草で一家五人が焼死体で発見だとか、秋田で親が子供に殺されたとか、そんな物騒な事件が取り上げられていた。
(……………物騒だなあ)

そう思っていると目の前に朝食のトーストとベーコンエッグ、オレンジジュースが置かれる。顔をあげるとそこには穏やかに笑う義姉の美紀がいた。

「おはよ、みんとちゃん」

「美紀ねえ、はよ」

「相変わらずNHKなのね」

美紀は苦笑し、自分もみんとの隣りに座る。すると、『え?』と

いう驚きがみんと希緒の口から零れた。

美紀は不審に思いテレビを見ると、そこには『S県利水市のビルが倒壊』というテロップと映像が流れている。空が一瞬明滅したかと思つた次の瞬間にはビルは倒壊していた。その、どこか不可解な映像に希緒と美紀は呆氣に取られる。

そして、気付いた時には

「みんとっ！」

「みんとちゃんっ!？」

みんとが椅子から崩れ落ちていた。

みんとが氣を失つていたのは五分程。希緒も美紀も心配そうにしていたが、みんとは氣がつくとさつさと朝食を済ませて制服に着替える。

「みんとちゃん、やっぱり今日は休んだ方が……」

美紀は心配そうに尋ねるが、みんとは大丈夫だからと譲らない。

「それじゃ、いつてきます」

みんとはこれ以上氣遣われないようにそさくさと家を出ていった。

昼休み。みんとはいつものように顔の右半分を前髪で隠した目付きの悪い少女、科本花鈴しなもとかりんと一緒に昼食を取っていた。いつもは楽し

いはずなのだが今日はどうにも盛り上がらない。原因は分かっていた。

「シナモンちゃん、顔に死相が出てるよ？」

みんなのその問いに目の下に大きなくまを作り、頬こけた花鈴は恨みがましい視線でみんなを見やる。

「……ちよつとバイトが入ってね。そのせいで昨日の夜中から今日の朝、学校行く時間ギリギリまで仕事でね……」

「おう、それは大変。しかも非常識だね。労働基本法をぶつちぎってる。フフフ」

楽しげに笑うみんな。きつと怒って襲って来るだろうと思ひみんなとは笑いながらも身構える。

「あう？」

しかし、花鈴の攻撃はやってこない。見ると花鈴はその場で眠っていた。どうやらかなり疲れていたらしい。一晩で一体どれ程の仕事をしたというのか。

「……うーん」

することが無くなって空を見上げる。

一瞬、空が揺らぐ。

「……おう？」

驚き、目を擦ってもう一度見るが空はいつもと変わっていない。

おかしい、とみんなは思う。朝から何が妙だった。言い様のない違和感が拭えない。

それが何なのか考えるがまったく分からない。

「ま、いいや」

結局、みんなは考えるのをやめ、鞆から作りかけの人形とソーイングセットを取り出す。そして、鼻歌を歌いながら人形を作り始めた。

日も落ち始めた頃、屋上に一昔前の演歌が響き渡る。

「おう？」

みんなとは人形を作る手を止めて花鈴の制服のポケットを漁る。取り出されたのは携帯電話。演歌は花鈴の携帯電話の着信音だったらしい。

みんなとは携帯電話と未だ眠る花鈴を見比べ、

「シナモンちゃん、シナモンちゃん」

花鈴の身体を揺する。が、かりんは起きない。どうしようかと思った時、人形に刺さったままの針が目に入った。

逡巡。と、次の瞬間には手に針。そして、針を花鈴の額に近づけていった時

「んあ？」

「あ」

プスッ。

いきなり花鈴が目を覚まし、額に針が突き刺さる。

覚醒と同時に走る激痛。

「~~~~~っ！？」

額を押さえ、声なき悲鳴を上げて転がり悶える花鈴。

思いの他深く刺さったらしく、針は花鈴に刺さったままだった。散々転げ回ったところで、みんなとは恐る恐る尋ねる。

「シナモンちゃん……大丈夫？」

「大丈夫なわけあるかテメエこの野郎っ！！」

花鈴の怒声。みんなとは不思議そうに首を傾げる。

「私、女だよ？」

「だまらっしゃいっ!!」

言いながら、額の針を取って床に叩き付ける。

「みると、アンタ人に針刺すってどういう神経してんだっ！ 頭おかしいんじゃないかいっ?!」

「おかしくないよ。そもそも、携帯鳴ってるのに起きないシナモンちゃんが悪いんだよ？ それにシナモンちゃん、一回寝たら無茶なことしないときけないじゃん」

うぐ、と花鈴は言葉につまり、何かに気がつく。

「ちよっとみると。アンタ今電話って言った？」

「うん」

いつの間にか着信音が途絶えていた携帯を渡す。

若干引きつった表情で受け取る。

「……………」

花鈴は無言のまま携帯を開いた。

「……五時……半……っ!!」

慌ててどこかに電話を始める花鈴。顔が真っ青だった。

「もしもしっ、ソイルかっ!? ……うっ、すまん。今すぐ準備……」

……はあっ!? 動きがあつたのかっ？ それはマズいな……。ああ、

ああ、分かった」

パチンツと勢い良く携帯電話をたたみ、

「今からバイトだから、また明日なっ!」

慌ただしく屋上から出ていった。

一人取り残されたみんと。

「……帰ろう」

ちよっとつまらなそうに呟き、作りかけの人形を片付けて屋上から出て行った。

「……そういえばシナモンちゃんってバイトしてたっけ？」

帰り道、ふと気付いた。言われた時は気にしていなかったが、思い返して見るとかりんはバイトをしていないはずだった。

（なんか今日は本当に変なことばっか……）

ふう、と柄にもなく溜め息をついた時、視界に赤い何かが入った。
「ん？」

興味を惹かれて近寄って見ると、みんなの瞳が歓喜に輝いた。

「お、おおうっ！！」

地域のごみ捨て場のゴミ袋の山の上。

赤い体。バツ印とボタンの目。くたびれた長い耳。綿が零れるジグザグな口。粗い縫い目。

それは、つぎはぎの赤いウサギのぬいぐるみだった。

みんなはその人形を掴み上げうつとりと見つめる。

「ああっ、こんな素敵なぬいぐるみにこんな所で出会えるなんてっ！
ウフフツ、早く帰って綺麗にしてあげなきゃっ！」

早く帰ろうとぬいぐるみを抱き締め、コツツ、という音が後ろから鳴った。

「おう？」

振り向くとそこには赤い豪華なドレスに身を包んだ美しい女性がいた。女性は一瞬だけ逡巡し尋ねた。

「……あなた、ミント？」

巻 2 〈少女と刀〉

全速力で家に戻った花鈴は、息を切らしながら制服を脱ぎ捨てる。タンクトップにショートパンツ、その上に要所に金属板の付いた半袖の黒いジャケットを着て、後ろ手に一纏めに縛っていた髪はツインテールに結び直す。顔の右半分はやはり前髪で隠したまま。

もう一度携帯電話で連絡を取る。

「ソイル？ ああ、……はあっ？ ハリマクの奴を見失ったのか！ ……ん？ 今度はあの魔女だと！？ はあ……、場所は？ ああ、分かった、大丈夫、問題無い」

それきり携帯電話を切ると爪先と脛に金属板が付いたブーツを履き、手には黒い鋼鉄のグローブ。

「ったく、アタシは引退したはずだったよな？」

ぼやき、外に出る。そして、反対側の民家の屋根に向かって大きく跳躍した。

「……あなた、ミント？」

「？ そうだけど……」

この女性が誰なのか、みんとに心当たりは無かった。心当たりは無いはずなのに、この胸に去来する懐かしさは何なのだろうか。

女性が一步踏み出そうした瞬間、

「近寄るなっ！」

どこからか声が響く。

「っ！？」

みんとは驚き辺りを見回すが人っ子一人いない。

「ヒストレイア、貴様、何をするつもりだ？」

見えない誰か 声からして男だろうか は明らかに目の前の女性 ヒストレイアに敵意を持って問い詰める。

「私は」

「そこまでであっ！！」

ヒストレイアの声が天からの声に遮られた。

誰かが、声からして恐らくは女性が空から降って来て地響きの様な轟音とともに着地する。着地の際の衝撃により粉塵が舞い上がり、みんなからは誰が来たか見えない。唐突な出来事に惚けるみんなにさっきの『見えない誰か』が叱咤する。

「何してるっ！ 今すぐここから逃げろっ！！」

「う、うんっ」

混乱の極みだったみんなとは言われるがまさにその場から背を向けて走り出した。

粉塵が治まり、そこにいたのは花鈴だった。花鈴はヒストレイアを睨み付ける。

「ったく、アンタのせいで、アタシの仕事が増えちまったんだ……」

天崩魔女ヒストレイア。連環環境管理基本法第四条、第十条、第二十三条違反並びに生命魔導改変の疑いにより逮捕する！

戦闘態勢になる花鈴を見てヒストレイアは愉快そうに笑う。

「フツ、可愛い局員ね。ヘイムダルは余程人で不足なのかしら？」

「うるせいつ、そんなの随分前からなんだよ！！」

花鈴が喚くがヒストレイアはニコニコと微笑み聞き流す。

「私、あなたみたいな子、好きよ。名前聞いていいかしら？」

まったく敵意の無いヒストレイアに花鈴は毒気を抜かれて構えを解く。

（冷血無比の史上最悪最凶の魔女なんじゃねえのかよ。物凄いフレンドリーじゃねえか……）

「連環環境管理局『ヘイムダル』元・対魔人一課『バルムンク』所属、科本花鈴。今は囑託局員だよ」

ヒストレイアは感心した様にポンと手を叩く。

「バルムンクのカリン……それじゃあ、シナモンちゃんはある有名な『雷帝』なのね」

花鈴はギョツとした。

「今、シナモンって言ったか？」

「ええ、だってあなたシナモンなんでしょ？ だからシナモンちゃん」

「マジかよ……」

みるとまったく同じ感性のヒストレイアに愕然とする花鈴。と、その時

「来た」

「っ！？」

異様な魔力に花鈴は拳を構え、ヒストレイアが殺気もあらわに振り返る。

そこにいたのは黒いスーツ姿の金髪碧眼の青年だった。

「取りあえず、邪魔者にはご退場願いましょうか」

パチンツ、と指を鳴らすと花鈴の目の前に四つの魔法円。そしてそこから勢い良く何かが飛び出した。

それは金属の鎧に包まれたカマキリの様な巨大な生物だった。それが四体。

「甲霸虫　っ！？」

花鈴は驚くも、すぐさま甲霸虫に向かって駆け出す。と、甲霸虫は大きく翅を広げて飛び上がり、鋭い足で花鈴の襟首を掴み飛び去った。

「なっ、放しやがれ畜生っ！」

甲覇虫はみんとが走っていった方角に飛んで行く。

「くっ！」

ヒストレイアは慌てて追いかけようとして駆け出すが、一瞬で青年が立ち塞がる。

「させませんよ。さあ、来てもらいましょうか」

みんとは利水市で一番大きい森林公園まで逃げて来ていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……な、何だったんだろ？」

「さっきの女は犯罪者だ」

また、見えない誰かの声。辺りを見回してみるがやはり誰もいない。

「……やっぱりいない」

「なんていうか驚くかもしれないが、その、君が今抱いている人形、なんだが……」

「へ？」

みんとは抱いていたウサギの人形を見る。すると、人形がブルブルと震え出す。

「うおっっ?!」

驚き手放すと、落ちた人形は見事に着地。みんとを見上げた。

「驚かしてしまつてすまない。私は三日月宗近というものだ。私は、あの女を……聞いているか？」

みんとは宗近と名乗るぬいぐるみの話をまったく聞いていなかった。興奮で鼻息も荒く、目は夢と希望に輝いている。

「生きてる、ぬいぐるみ。夢の、ぬいぐるみとお喋りっ!!」

みんとは宗近を抱え、花畑を駆ける可憐な乙女のようにアハハ、ウ

フフと踊り出す。

抱えられた宗近の表情が引きつった　様に見えた。
踊り終えたみんとは、若干疲れた雰囲気、宗近に生き生きと尋ねた。

「私、秋留みんと。君は？」

「はあ……、宗近。三日月宗近だ」

げんなりと答える宗近。そんな宗近とは対照的にみんとはますます興奮する。

「三日月宗近っ！　すごいっ、かの高名な天下五剣の一振りと同じ名前なんて……生きてて良かったっ」

ついには感動の涙をみんとは流したその時、

「　　ッ……！」

この世の物とは思えない、おぞましい咆哮が天より轟く。

驚き見上げた先にいたのは金属の鎧に身を包んだ巨大なカマキリ、
甲霸虫。

「甲霸虫っ?!」

宗近の叫びとほぼ同時にズンツという地響きをたてて甲霸虫がみんとの前に降り立つ。

「あ、ああ、あ……」

腰を抜かしその場にペタリと座り込むみんと。

ただの高校生。まして、喧嘩慣れをしていなければ運動もあまり得意ではない。それ以前に、目の前の怪物は人に取ってあまりに強大過ぎるではないのか。

「く……！」

宗近は短い手足でトテトテと守る様にみんとの前に立つ。だがそれはあまりに無力に思える。

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

甲霸虫の巨大な鎌がみんとを真っ二つにしようとする振り下ろされた。

森林公園のそばの公民館の駐車場に閃光がまたたく。

「『雷槍ッ！！』」

猛々しい雷撃と共に花鈴の拳が突き刺さり三体目の甲覇虫が炭化し砕ける。

「後一体っ！」

と構えたところで四体目がどこにもいない事に気付いた。

「いない……。マズい、一体逃がしまった……。」

ソイル？ ああ、一体逃しちまった。あと、コイツら変だぞ。妙に統率が取れてた。ああ、よろしく」

ソイルとの連絡を切った瞬間、森林公園の方から光が立ち上ぼった。

振り下ろされる鎌。間に割って入る宗近。

走馬灯がみんとの脳裏を走る。

楽しかった事、悲しかった事、今日までの様々な思い出。

その最後は見知らぬ土地だった。

中空に浮かぶ巨大な魔法円。

泣き叫ぶ女。

笑う男。

「

」

男が呟き、荒れ狂う『力』の奔流が身体を、魂を、突き上げる。視界は白く染まり、口からは絶叫が溢れる。

「ああああああああああ

ああ？」

絶叫は、疑問符に変わる。

視界は戻り、目の前には浮かぶ魔法円。その魔法円に阻まれる甲
覇虫の鎌。宗近はどこかへ消えていた。

次に、みんとの視線は自分の手に注がれた。

「何、これ……」

鮮やかな緋色の刀身は絶えず揺らぎ、常にその表情を変え、C字
の鐐の中央には緑の宝珠、柄は純白で尻には宗近型のストラップ。
それは八尺もある、斬馬刀であった。

刻まれし銘は『緋月』。

「みんとつ、危ないっ!」

宗近ストラップから声上がる。

「え?」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」

いつの間にか魔法円は消え、再び甲覇虫の鎌が振り下ろされる。
自然、身体が動いた。

一閃。

鎌は逸れ、腕は、斜めに両断されていた。
みんとは立ち上がる。

(……いけるっ!)

根拠は無い。

ただ緋月がある。それだけで十分だった。
きっと、いや絶対になんとか出来る。

全身から力が溢れた。

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

悲鳴に近い咆哮を上げ迫り来る甲覇虫。

みんとは緋月を脇に構え、腰を落とす。

次の瞬間には鎌が振り下ろされ、一步。

飛ぶように間を詰めて下から上へと胴を薙ぐ。

そして、ズツ、とずれた瞬間、甲覇虫は燃え盛る火炎に包まれた。
突然、酷い倦怠感がみんとを襲う。
よろめき、へたりこむ。

まるで力と言う力が一息に出てしまった様な感覚。

「あう……」

視界はだんだんと狭くなる。

（おう、こりやだめだ。ウフフ）

みんとは呑気に笑みを浮かべる。

「みんとっ！？」

ここにはいないはずの花鈴の声。

（なんで、シナモン……ちゃん……が？）

そこで、みんとの意識は途絶えた。

式へ少女と男

真っ暗などこか。

ピシリと亀裂が走り、広がる。

そこから覗く深紅の瞳。揺らめき蒼い瞳に変貌する。そこから、揺らめく度に瞳は翠、緋、浅葱、黒と色を変える。

最後には金色に。

途端、それは、顔を、手を、足を、腕を、脚を、肉を、骨を、五臓六腑を、脳髓を、魂を。

その瞳を見る。

ただ、それだけで、全てが、焼かれ、燻られ、碎かれ、擂り潰され。

なのに、それなのに、確かに生きていた。

グチャグチャな肉塊と化しても、確かに生きている事が理解出来た。

理解、出来てしまった。

「ッ!？」

声にならない悲鳴。

そして、見た。

金色の瞳は愉快に笑って

「ッ!？ はっ、はっ、はっ……」

みんなとは勢い良く起き上がり、肩で浅く息をする。
全身汗だくだった。

「何、今の……」

恐怖に、身体が震える。

「みんとちゃんっ！」

呼ばれて顔を上げる。

「美紀……ねえ……」

美紀がいた。

美紀は安堵し、みんとのそばに座る。

「みんとちゃん、もう大丈夫なの？」

言われて気付く。なんで自分は自分の部屋にいるんだろうか。

そもそも、あの時起こった事は現実だったのだろうか。

「美紀ねえ、私、どうして……」

「利水森林公園で貧血起こして倒れたそうよ。三日間も起きなかったから私も希緒ちゃんも心配したのよ？」

「三日も……？」

みんとはただ驚くしか無かった。やはり、あの時の事は全て現実でその事が原因なのか。いくら考えても答えは出なかった。

そこでふと、違和感を覚えた。

みんとは三日間も昏睡状態だった割に美紀の様子があっさりしていた。

みんとはどうにも気になり美紀に尋ねる。

返って来た答えにみんとは驚き、いてもたっても居られず急いで部屋を飛び出した。

玄関まで来て美紀に引き止められる。

「みんとちゃんっ、どうしたのっ?！」

「ちよつと行かないといけない場所があるから行って来るっ!」

急いでるみんとに美紀はためらいがちに尋ねた。

「その格好のまま行くの？」

「……………おう、忘れてた」

「分からないってどういう事だ？」

パソコンの画面を前に花鈴は首を傾げる。

「そりやおかしいだろ！」

花鈴の叱咤に画面の少年は困った様に弁解する。

『そんな怒鳴られても困ります。』

三日前に起こった事については本当に謎だらけなんです。

ただ、今現在分かっているのはあの甲覇虫の脳に魔導核が埋め込まれていたこととヒストレイアがその町に潜んでる可能性がある、ということくらいですよ。』

それに、と神妙な面持ちで少年は告げた。

『先輩の友人の秋留みんとさん……でしたか、おかしいですよその人。ヒストレイアが接触して来ていたということで念の為ミールで調べてみたんですが、パスコード？ ？以上が無いと彼女の情報の閲覧が不可だったんです』

花鈴のアパートへと向かう途中、みんなの目の前に男が倒れていた。

（おう、生き倒れの人なんて初めて見た……）

しみじみ思っていると男が身動き、ゆっくりとした動作でみんなを見上げた。

目が合う。

「……………」

「……………」

少しの沈黙の後、

「飯を……飯を恵んで……くれ……」
絞り出すような声でそう告げた男はそのまま力尽きた。

「あの、これどうぞ」

みんなとはうめえ棒チーズ味をバス停のベンチに座った生き倒れていた男に差し出す。

「おおっ、ありがとう、少女よ！」

男は感謝し、うめえ棒を受け取った。みんなとはのほほんとその隣りに腰掛ける。

「うめえ棒おいしいよ」

「何、そうなのかつ！」

「うん、それに安いし」

「そうか、そうか、それは良かった！」

何か納得した様に頷いた後、男は猛然と袋を開けうまい棒にかぶりつく。

みんなとは改めて男を見る。

肩まである天然パーマのポニーテール。褐色の肌。翠の瞳。端正な顔立ち。背は高く、細いが逞しい。服は緑のアロハにヴィンテージ物のジーンズ。

中東辺りの出身の様に見える。

はたと目が合った。

男は笑う。

「どうした？」

「おう、何でも無いよ。そうだ、自己紹介。私、秋留みんと。おじさんは？」

男は悲しそうな顔をする。

「おじさん……か。きつついなあ、俺はまだ四十八だぞ？」

おじさんと呼ばれる年齢ではとみんとは思うがそれにしても男は四十八歳には見えなかった。

男は再び笑う。

「まあ、とにかく、俺も自己紹介だな。ハリマク、ハリマク・ラテイ・リイオレシアだ」

みんとはハリマクを見つめ、しばし黙考。その様子にハリマクが首を傾げるとみんがうんと頷いた。

「じゃあハリイだ。よろしく、ハリイ」

「ハ、ハリイ？」

みんとはうんと頷き立ち上がる。

「まだお腹空いてる？」

「あ、まあそりゃ空いてるが……」

みんとは若干嬉しそうな顔でハリマクに手を伸ばした。

「おう、なら行こ」

「……よく分かんがそうするか」

「なんだと？ それはどういう事だ？」

尋ねたのは赤いウサギのぬいぐるみ 宗近だった。花鈴の手で回収されていた宗近はトテトテとパソコンの画面の前まで歩くポテツと座る。

「……かつ、可愛いっ！」

宗近の所作に画面の向こうで少年が悶えた。

「おい、ソイル。後で覚えてろよ」

「す、すいません。あんまり可愛い動きだもんだから……。それより、みんとさんですね。おかし過ぎますよね。先輩方の話を聞く限

りだと一般人、しかも連環世界でも稀な魔法技術未発達の地の一般人が……」

「そうだな。それに甲覇虫に襲われた時のあの尋常じゃない魔力……とても人の魔力とは思えなかった」

『確かに、あの時検知された魔力の大きさは非常識、でしたね。』

これはやつぱりすぐにこっちに連れて来るべきだったと思います」

「そうだ。それをこの馬鹿娘は……」

言いながら宗近は花鈴の方を振り向く。

「なんで連れて行く事を拒否した!？」

今まで黙っていた花鈴は宗近を握り締め、睨む。

「決まってるんだろ」

一拍置き、

「ヘイムダルの研究部の奴等にみんなと任せたらどんな事になると思っ
てやがるっ！ みんなが全裸に向かれて、あいつらにねっつつこ
く視姦された後にみんなの華奢で立派なあの身体があの手この手で
なぶられるんだぞっ!？」

特にあの主任のアガサ！ あいつの手であのみんなとがメチャク
チにされると思うと……アガサぶっ殺す！」

一気に捲し立てる。

宗近絶句。

ソイルは半信半疑な顔だった。

『先輩、流石にそんな事は有り得ないですよ』

花鈴は首を振り、真剣な目でソイルを見る。

「前にパラサイトティアスの事件があつたら？」

『ああ、あの時は大変でしたね』

ソイルは遠い目をする。

「あの時母体になったのが事務のエミネだったんだ。それで研究部
へ連れてかれてな、調査が終わった後も何度も何度も研究部に顔を
出してるんだ。それが一年も続いたら流石に不審に思うだろ？ だ
から聞いてみたんだよ、アタシ」

そこで花鈴は一旦区切る。

変に高まる緊張感。

ソイルも宗近も息を飲む。

「エミネが研究部の奴等に【ピー】されて【ピー】された拳句【ピー】と【ピー】されてもう研究部の奴等の【ピー】が無いとダメって言うふうには調教されたんだと。」

しかもエミネも満更でも無いらしくな、その一部始終を収めた映像を見せられたよ……」

沈黙。

ソイルも宗近も何も言わない。

「分かったならもう連れて行くとか言うなよ」

『う、うん。分かりました』

ソイルは素直に何度も頷き、宗近は、

「わか……いや、だめだっ！　やはり、連れて行くべきよっ！」

反論し、花鈴に握り潰された。

「なんか言ったかくそぐるみたい……」

「もぎゅぎゅぎゅぎゅっ……」

悶えて、ポテポテ暴れる宗近と全力で握り潰す花鈴。

『くそぐるみって……』

若干引いた様子のソイル。その時、

『ん？　あれ？　うそっ！』

画面の向こうでソイルは手元の機械を何度も確認する。

慌てた様子のソイルに気付き、花鈴は宗近を放り投げてソイルに尋ねる。

「のあっ……」

「どうした、ソイル？」

『あのっ、ハリマクの反応が、先輩のアパート前にあるんですけど……』

「っ……」

花鈴の目が大きく見開き、次の瞬間には隠し棚から、黒い鋼鉄の

グローブを取り出し部屋を飛び出した。

「ところでみんとちゃん」

「おう？ どうしたの、ハリイ」

「その友達ってどんな子なんだい？」

「おう……」

みんとは少し考えて頬を緩める。

「すごく可愛い子。科本花鈴っていうんだよ」

ハリマクの顔が若干歪む。が、みんとは気付かない。

「いっつも顔の右半分髪で隠してるし、目付き悪いし、口も悪いけど優しいんだ」

ハリマクは困った様に後頭部をガシガシ掻いた。

「あー、俺にもそんな知り合いいるわ。うん」

そう言ったハリマクの顔はどこか面倒そうだった。

「？」

みんとはその様子を不思議そうに見たが前を見ると花鈴のアパートのすぐ側まで来ていた。

「ハリイ、もうすぐだよ。早く行こ！」

みんとはハリマクの手を取り、アパートに向かって軽く走る。

引っ張られながらハリマクは懐かしそうな顔で思う。

（なーんか掴めない子だなあ……子供の頃のアイツみてえ）

そうしてアパートの駐車場まで来た二人を待っていたのは花鈴だった。

「シナモン……ちゃん？」

様子がおかしいかった。手には腕まである黒い鋼のグラブ。まるでロボットアニメに出て来るロボットの腕と手みたいだとみんとは

思った。

花鈴はみんなの背後を睨んだ。

「ようやくこれで面倒事が終わるってこったな。まあ、みんなと一緒に来るとは思わなかったけど……覚悟しな、ハリマク・ラティ・リイオレシア！」

みんなとは状況が掴めず助けを求めるようにハリマクの方を見た。

ハリマクは「やつぱり……」と呟きながら肩を大きく下げて溜息を一つ吐く。困った顔でみんなを見た。

「みんなとちゃん、どうしよう？」

「おう……」

みんなとはしばし考え込み、うんと頷くと眉尻を下げはにかむ。

「お腹が空いたよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7900d/>

Radical Magical Witches

2010年10月11日23時04分発行